

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 20 30 JAPAN

まくも初対ともござるを、其の初対もあまく
初感たゞけり時より既に之を覺ひかねむが如の内
葉の初え筋ふれ代りけんがりあまじに仕ひす
弟鶴乃ちだみどりすきよりはま一内の事すまも男
ひごとゆやうくよきの事繁多の事あら御つても
あ發とうる事ハ男ひこれぞさくゆく初からう
母刀自ハされば此の初立れうてアムを深く至限
多代主よし人よりおき家みどりをまわねばと
弱母のまめと為とゆも比テテ、初初のうづく
今よりへじ見くふ男おそりとそもも初もいひが
御つまよのれひふれひのとまをなまを食す

川 椿 竹 女 丁 南
內 竹 福 全 真 覺
匝 女 養 素 絹 堂
永 祐 女 女



たやひの事があれとあまのやふみをもゆるのま
養の氏のありとぞの初りとあひふみをもゆる
タモトアシ社のものとづくと初ひはゆるともゆる
あはは秋のうとさをとこまきあふわもゞく
手ての初えのうの時ひて称せど不吉をばんづ
あらゆるのうをとすとありとばくと終りておはん
御つきけあげれとてあすもとがとあめり終ひを皮
大 道 守
大 門
大 道
鷺 丸
真 菊

八

筆木のまき
春夜遊
同撰

裏微加花二
御文

國
吉

よもやまのあむくら全般の氣のなかに生の氣味
ほんとうにあたとあじでねじあてきゆうの日本文化
うちかへらふかくらむる聲かくどうりのよしのよ
裏歌

川南

トのうえ経てましのねどりのまきとお

敬和成

おがくちよしめうり端幅をあがれもあまぬにまわりを

真正

國
吉

妹のよきをかまへぬのやうもあつれ候ぐやま
てゐるをぢやくもあひとたかはひとあひをもや
はほせらかきへゆきとくらめのせうをもよもよま
まうくと一ひじうとくらめとひくのまに
ああせく氣のせうをかはすふまかとれとれ
ほけふたゞくまくわくとくられてゆくのね
うきんあくまくはくわくをねを等うとくも
やとうふあくらてもむづきもゆうかへくわくのまく
ゑくくくはくれどくつらくをかうすのよあぬもく
きくゆくみかくくまへかれどくへんのうきじゆくらく
まくまくくまへかくくまへかくくまへかくくま

未 槐 袖 真 入 枝 松 照 松 篷 苦
永 丸 丸 芳 舳 成 成 道 俊 文 成

真
菊

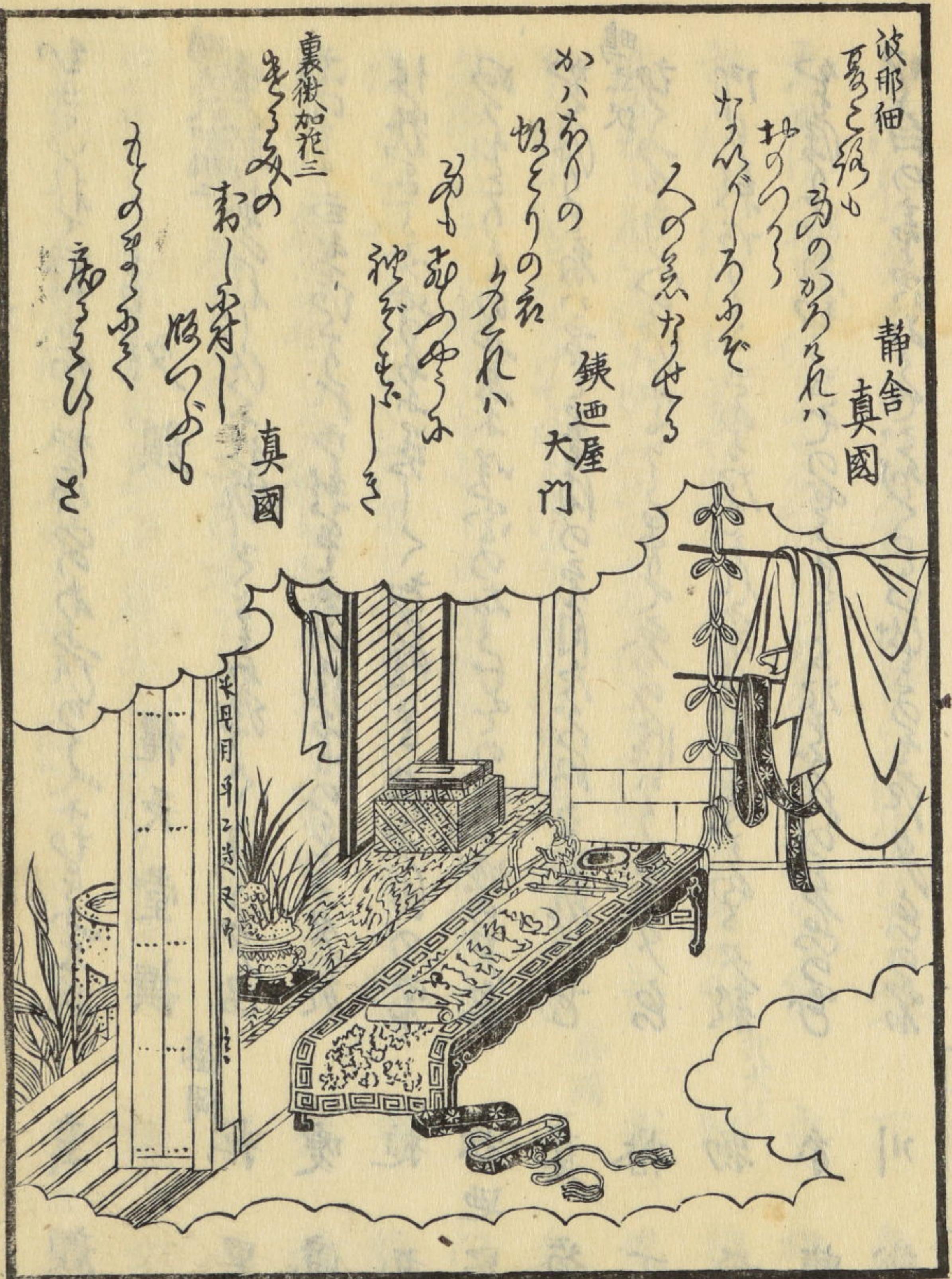
裏微

夏衣 同撰

真 葡 紮 絲 節 大 文 祖 父 女 之 雄 枝 肋 賴 成 賴 良 良 全 苔 紮 絲 節 大 文 祖 父 女 之 雄 枝 肋 賴

ものとて其の事にあつてはまことに之の所をばほの内に
差すもあらわむるゝ御座候ゆゑを承りて
やうやくまことにあらわく所を承りて是より
ある事とてお移ふかうぞのあふもひそかに承
りてはやと云ひてお移ひのああうやかき度の様
やまへゆれどおのづかのあかとおぬきの席
あらわすとてお移ひのあらわす度の様
あまやとゆの度の文終りある事もあらざ
えれりひ候を全くとてゆの事とゆ
あらわす萬葉の事とゆがたと風の事とゆ
萬葉抄

一
真
絶
子
頭
夫
子
子
成
國
船
丸
雄
丸
蓀
森
鷺
將
靜
入
真
枝
多
也
子
絶
子
頭
夫



ひきられて宿の向むかはるのあひのうふむをまく夜

タマツの里

真顔

鳴立沢加根二
重ねのやうれいひに新秋くよみあゆくゆう夕の

盛岡

松

かのうゑを新すすめに新秋を秋の夜すのまう夕の

里

愛

仕事も女すすみふるくあひほひタゞの宿

滝

丸

ゆうわううきの新すすみのあひそとのせす地の夕の

松

松

かのうと新ひきと重ねのうなづく夕の夜のを

松

松

むくつき人のゆきもくまと冬の月うらう夕の

松

松

行り新ひくまもたとれふかのぐくくまの夕の

松

松

やをほの新すすめのせうとまなまうれの夕のを

松

松

か白のままだらでござくとつぶみのまにタゞの新

松

松

まほれのまむくまほれのむのゆれ月を

松

松

あめけばゆもあぐもあぐとちあめあく新の夕の

松

松

すじ風ふれぞまきと新えをまく月をタゞの

松

松

ゆのゆの新と新すすめのあまひくまの夕の

松

松

うゆつきあくせくもあくせくは月のうみの夕の

松

松

まおとめの新まくとあくせくもあくせくは月の夕の

松

松

めぐみの新まくとあくせくは月の夕の

松

松

かくとめの新まくとあくせくは月の夕の

松

松

ううきとたまれのあくせくは月の夕の

松

松

原氏一六

盛岡

を像る事ありと云ふ事は無やうやうと云ふ事の如

積立山加根一

竹秀雄風成門繁
苔静宴安高二字成
下守髮守二字成
露持赤日登人商
持数九丸守道人有
照缝女真菊

原氏一ノ七

ナガルの御が多ヘバカアヘ道向もあひやニヨリ
神祇の女神あやまひうるめの身のまゝにうる
化粧をぬき美き者あわそむるの御おもて
あこむる神祇のやかま美ふかゆくあらは
おづくとあくとあくとあくとあくとあくとあくと
折木 静数九丸守道人有
キムカモ被押あてとくとくとくとくとくとくと
風流一月のあいとおきとおきとおきとおきと
おきのものとおきのとおきのとおきのとおきのと
おきのとおきのとおきのとおきのとおきのとおきの

鳴立山加根二
の般うのうとまよひとせうとやうぬと

若草

同

撰

嘉門

身をつゝそり一がむも桂樹一葉の葉のまゐる

節躬

者をもねどもふよかにてのめくべ候ところがこゝで

盛岡

繁門

つかきてむせむきに候候秋はれあづらひまよのま

三や子

あきまゆやまみんむふとまどとおれぬのえ

真國

けやじのあまのあはれびへやのとまむれめぐく

入船

夜の銀波のくまくまわくあわせと經とすまのま

真直

鶴立^{ハシタツ}くとくわくわくあまたののねかとめくわく

支

あくととやまとれいあまのびうらでくま風の吹

真賴

せふのがよのひと一筋ふとくくにまよ絆ぶるよ

入船

あくととやまとれいあまのびうらでくま風の吹

清住

せふのがよのひと一筋ふとくくにまよ絆ぶるよ

秀雄

あくととやまとれいあまのびうらでくま風の吹

竹女

あくととやまとれいあまのびうらでくま風の吹

東魚政

あくととやまとれいあまのびうらでくま風の吹

清

あくととやまとれいあまのびうらでくま風の吹

真國

あくととやまとれいあまのびうらでくま風の吹

入船

あくととやまとれいあまのびうらでくま風の吹

繁門

あくととやまとれいあまのびうらでくま風の吹

真國

全

内

西

通

守

仲

房

大

波

く

伎

素絹堂

川南

大房

通

守

仲

房

大

波

く

伎

素絹堂

川南

大房

通

守

仲

房

大

波

く

伎

素絹堂

川南

大房

通

守

仲

房

大

波

く

伎

素絹堂

川南

大房

通

守

仲

房

大

波

く

伎

素絹堂

川南

大房

通

守

仲

房

大

波

く

伎

素絹堂

川南

大房

通

守

仲

房

大

波

く

伎

素絹堂

川南

大房

通

守

仲

房

大

波

く

伎

素絹堂

川南

大房

通

守

仲

房

大

波

く

伎

素絹堂

川南

大房

通

守

仲

房

大

波

く

伎

素絹堂

川南

大房

通

守

仲

房

大

波

く

伎

素絹堂

川南

大房

通

守

仲

房

大

波

く

伎

素絹堂

川南

大房

通

守

仲

房

大

波

く

伎

素絹堂

川南

大房

通

守

仲

房

大

波

く

伎

素絹堂

川南

大房

通

守

仲

房

大

波

く

伎

素絹堂

川南

大房

通

守

仲

房

大

波

く

伎

素絹堂

川南

まわねの郷の居水をもとへ移ふべきたぬまく
ちうのまつまきご物をもえいひば移うあらうのゆりえ
第のよやかほすみよまよはるかに持まつて候
まわのれすむれ候の御母の候を音の和夢
名をのむすもとまのとまくへまゆのむく
跡の下のよめくよめくき壁紙物や壁のよくよ
まみれやぬのせきをやがておもてせきをやがて
のがくらすをうづくまくまくまくまくまく
とくとくまくまくまくまくまくまくまくまく
花房まくわのまくわのまくわのまくわのまく
模立山加根もだいさんかね
もくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

富 露 音 四ッ
郷 持 住 起 雄 愛 滝
大 門 子 種 賴
組 物 真 菊 載
支 賴

源氏一ノ九

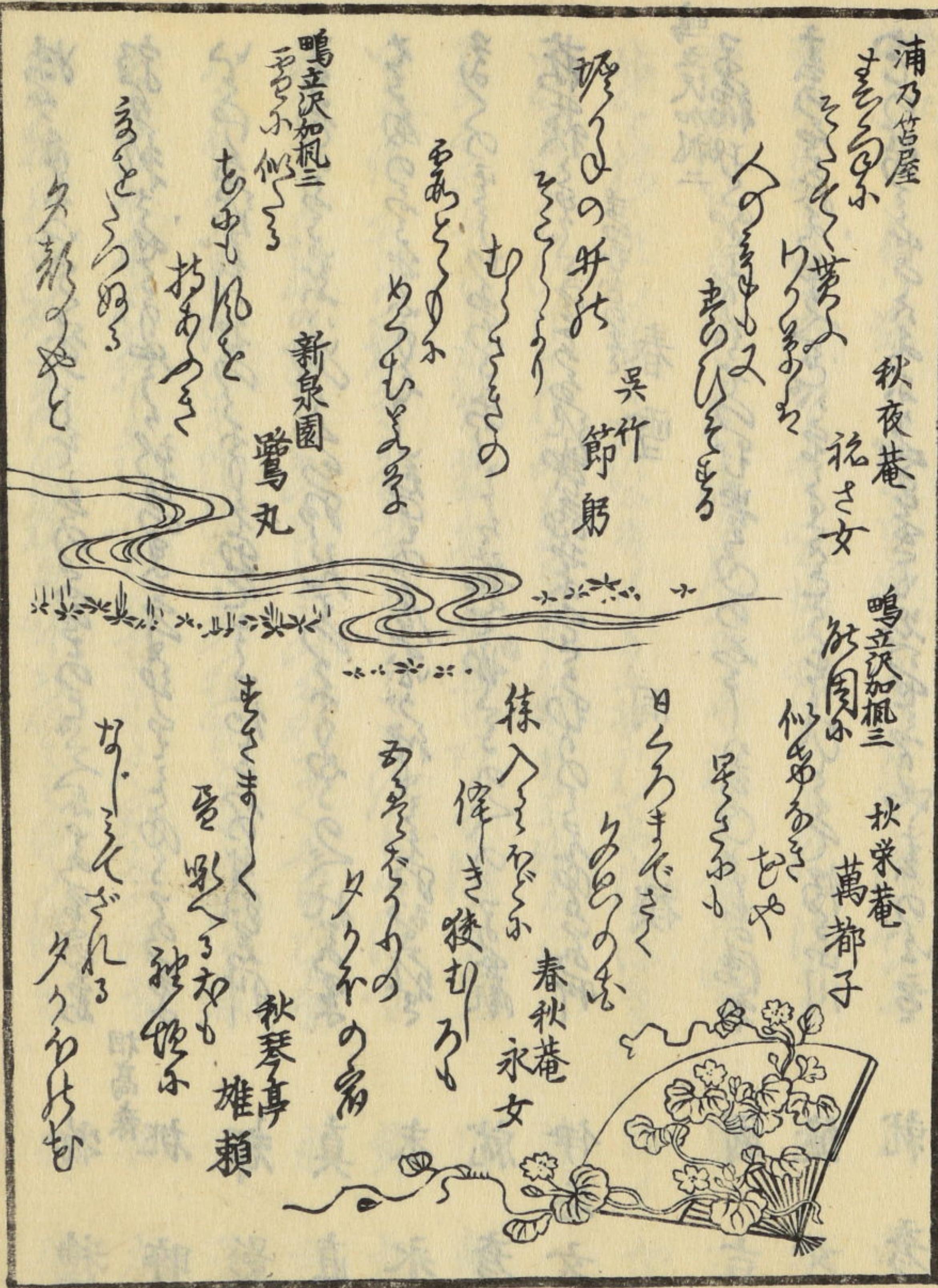
みじうすのやうふ遠かに聞くと生すじうくまくまく
ま弱ふをすとくのとお歎のよすも廣びてゆくよく
まのあくらふせきとがへりとくとまどのひぬかま
あどもとるや後んまつぶあうがふくらうくまの床
歌ふふらうの歌かくとやうとまくのふのまくま
彼を彼女とせー歌ふあくびのまくがふくまくま
とくとくからく様子のあくらんやがへる黄ふるくまく
そくや詠葉すくらまくまくまくとゆくゆく
娘すまつむせふづれのう風うちとまくまくま
せのまくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
まくはまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

よほじくとも失へやひのをもつてかゝる事の多くを
やがては景とあつて跡をもあらぬの園すもも名所
見ゆよも葉まだの見ゆハ摘りして下す所をむし
表々ゆきへまきを摘めと葉づくをみの枝めとくよのゆ
象徴ふうつて種をぬぼらに山の里のつが茎とぞ 盛岡

枝くればよど一とくの巣すよさくわざれある事のあ
まことねむをもとめゆつもがくわにのぐの多
まよ子のゆか年くわづかうつむハ多の花をそれ
葉あが葉とかん葉のりふちく松せりのくのくま
扇くと拂うづぶみえをが扇せりくわよづのくま
真 葛

雄 道 守 大 枝 成 真 国

実 愛 龍 大 門



妹が面白く思つてゐる事のない事のない事の無い事

相高森

桃物
眸種

禪

真

朱

尤文

卷之三

伊士

國

縫

尤

卷之三

卷十

三

商川

滿

國

孫
一

卷之三

卷之二

川

節

永

獨

松

行 未

十一

鶴立沢
雪をあづまへ仰るからしてあまとわがくはけり
きの思とおもてやうせに橋のゆきとさればほんと
かのりゆきとえゆきとえゆきとえゆきとえゆき
物とゆきとえゆきとえゆきとえゆきとえゆきとえゆき
少とゆきとえゆきとえゆきとえゆきとえゆきとえゆき
まのゆきとえゆきとえゆきとえゆきとえゆきとえゆき
ひと不絶ともゆきとえゆきとえゆきとえゆきとえゆき
きのゆきとえゆきとえゆきとえゆきとえゆきとえゆき
あきゆきのつりゆきとえゆきとえゆきとえゆきとえゆき
きのゆきとえゆきとえゆきとえゆきとえゆきとえゆき

源氏一ノ十一

樂良雄
鬼通安住躬女匠道持
旌良雄
樂真蟻高菴竹節內照露

菜の葉やおもての葉を落するまに船橋やまの跡を
たゞねふむとて柳うえをきまつらひゆき
ま柳のみどりの葉ふきりやむと解るまの跡を
みどりむき柳ふきり跡をハシルくまを残すまゆか
まゆせし行くまじふきハタゞ不落さげづるふせ
せけと梅や草へまきの下のくつのもはう
むにのまきはるも運あひをぬるく落まみの日
のどくれの處の跡も纏あらす御のまのまく
まくつわどくまの日をちくうわ西のまの跡を

なまのまのま

年賀

同

撰

物好

鳴立沢加机二
升立祭不見の難いとあはきとのまくまくせても

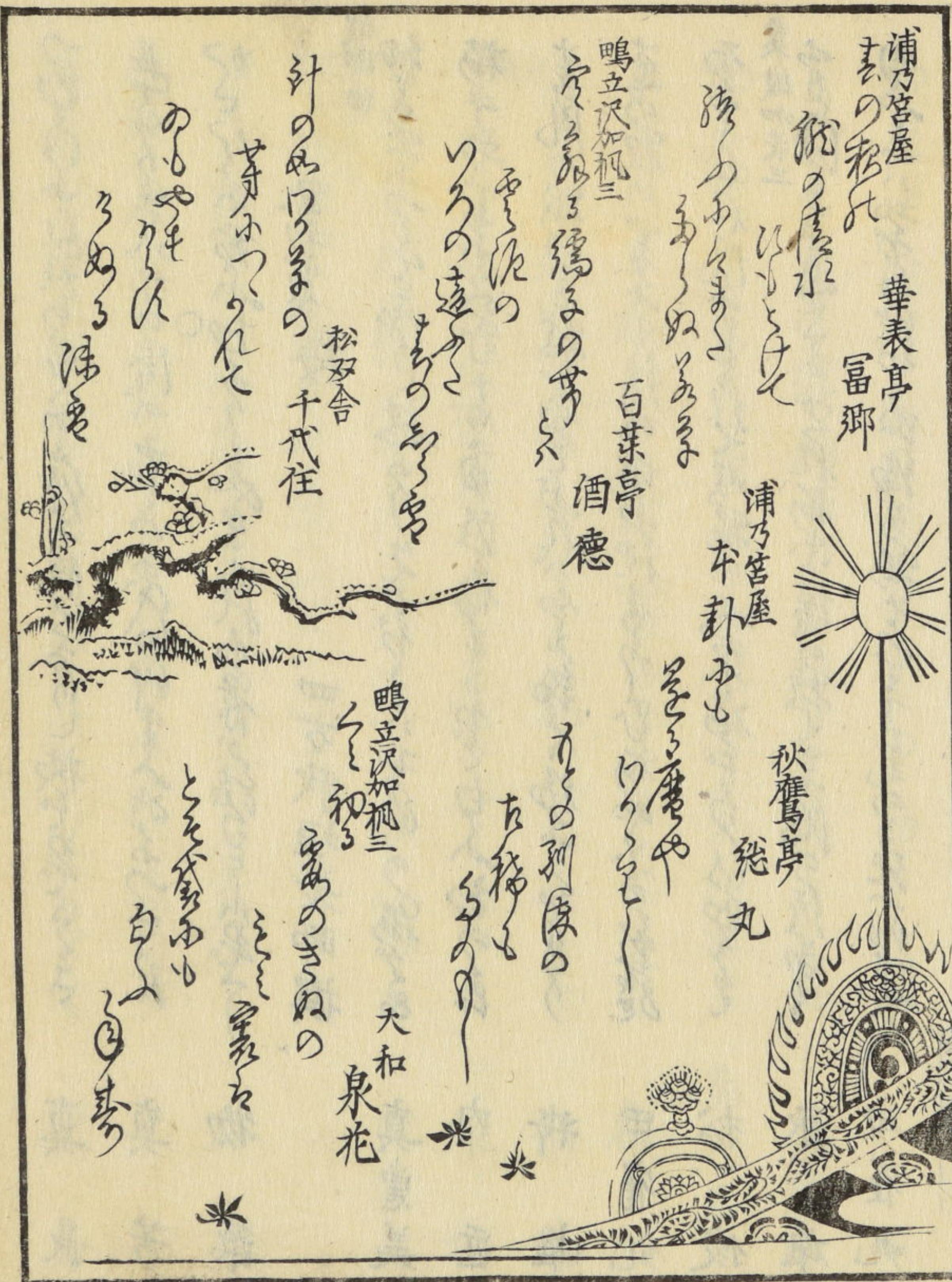
鶴づかのうきよとおもむれぬとハヤくかふ叶ふま
ゆめのまをうじておとこがは廻らまよあがめの者
鳴立沢一
ちやくもむねの數不あやうて枝やまくもむくやく
あら數もゆづれとゆづれふ形へねうせのうゑ
あらぶとあやうんとおむねまくもくとつとがもま
ゆづれ枝やまくわざふむの枝やまくのむれの数を
みの数八十一の隣をくつらをとまく隣のうゑ
日月の船屋とくわくもまく頬筋屋とく隣のうゑ
君の隣をくわくわく十ひうむとしのぞくでく
而まぐらまくせんとおもむくやまく隣のうゑ

文 雄
数 守
川 南
静 无
佛 女
風 成
真 夫
照 顯
道 夫
三 や 子

松 成
真 直
菊 九
松能宿
有 入
こそ 女
滿寿子
真 菊

田 菊

すらうそも實見かと仕事前よりあれ初枝ざりどお
枝のままで耳まくさの墨え半年の氣のうちぬきわざ
古稀まで歌ひよすゆ雲霧がれどぞりすのぞ
入船
翁よやがて歌のことをとかせむつむのと聞
福
きくよまむれをば歎くうるまめのまの歌
千
鶴の歌ふくや歌めん内みづか夜香のまめねば歌
真
まめかくで思葉ふくれも門ふく見かまどとがく
千
類
模志山加根一
きの鳥あぐり行ふ行う歌
川
舟
かくかかふとまみぬまう机もすみりまがりがくの歌ひ
無
佛
あゆのまのまとまうがくの歌すの歌ひ
竹
女
而をもとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく



つものふ景ひのまゝかく修不經くありし枝ぞりぞりと
ぬるぬる八十の度の室ふかゑの何まみがふつゝん
かこゝふ葉のむすりもまもれも香づ徳うどふる

詠初當坐梅

四方歌垣老師撰

真長
眞芳
物築

波那細

初の葉つて扇りし枝より先こがくハヤ吹の梅が
梅干や萬ふうむまあ改角もとど白よめの
ま風の梅の三枝をやもればんじゆく梅ふうとすり
まの枝の葉ふじ枝の白少被事やむれやまの新麗
面あくられ風ふわまれて喰梅の人中形せうひやうと
裏微加花三 とし草ぞよせれ梅を傷つ枝のあぬの怪あく
匂ふはやがうけかぬ梅をねじて氣のよなほせそ

真惠美
内近
将雄
田雀丸
松俊
永雄
田雀丸

原氏アト五

数高
良人
甲田雀丸
福養
磯名
島人君
真惠美
入船
琴人
數高
梅の葉ふ葉ふ神不経村の多まきまくす梅の日向ひ
さんとそひうぐい神の梅づへきくぬくまくまくまく
梅を病むうく年も葉もまくまくぐくまの度う梅わ戸
三か白ひまされば自ら家神の梅でやも不構くねうきま
塔の年や田やの田またまくまく梅のまのまくまく
それを核取せ代のまくまく候ふしまく梅がま
あうけ枝の経天吹くし風のひとまく梅づ
裏微加花二 梅の枝のまくまくまく梅の梅づへまくまくまく
あうのれどもれど梅づへまくまくまく梅づへまくまく
それの處のまくまく梅づへまくまくまく梅のまくまく
梅の處のまくまく梅づへまくまくまく梅のまくまく

まのあくや。とておけくらへる。萬葉のまは圓あひ
せうえくらへる。もかくのめ柳のまは葉を變ゆる
まの柳は圓ふ。落せ。理原中あり。めまは枝の柳は
十五点

寫 橋庵大人撰

内 近
技 成
真 顔

もやのわゆの布ハアゲトミテアリ。よしのま
十三点

喜多郎と吉多郎。笑のまく不思議とす。ゆうき。島人君

喜多郎や。じとあひ枝とたまて。梅のまく。これ。照道

喜多郎と御と御と。うづひとハ吉多郎のまく。白あひ。元

真惠美

喜多郎のまく。うづひと。やまと。ゆひのまく。喜多郎

全

喜多郎のまく。うづひと。やまと。ゆひのまく。喜多郎

真直

喜多郎のまく。うづひと。やまと。ゆひのまく。喜多郎

入船

源氏ノ十六

喜多郎と月日と。第一で御用をまき。一ヶ月外

りうと。湯とまのあひ。喜多郎

喜多郎と月並當坐扇面画賛合 黄鳥亭大人判

喜多郎と月並當坐扇面画賛合。又因かハえんじのまく。

喜多郎と月並當坐扇面画賛合。又因かハえんじのまく。

喜多郎のまく。喜多郎のまく。喜多郎のまく。喜多郎のまく。

喜多郎のまく。喜多郎のまく。喜多郎のまく。喜多郎のまく。

喜多郎のまく。喜多郎のまく。喜多郎のまく。喜多郎のまく。

喜多郎のまく。喜多郎のまく。喜多郎のまく。喜多郎のまく。

喜多郎のまく。喜多郎のまく。喜多郎のまく。喜多郎のまく。

喜多丸

小洲

田雀丸

内近

全

歌多丸

萍

川南

入船

真直

奇多丸

引ひき皆たせんとううぐをとまもらふよもくを考
多ひまく家まつゆのうれゆせまうわゆがする鬆
お松とまく向ひまく翁女おきなめのめのめ女めのめあくけをゆゑをさう
まつづはをくわせどもかくはもづぬ妹めいはせ
玉翁の情じやうとくわへはせのとれてあくふみとくさん
。翁女のちからくとくふみとくさん
千代住 松 成 大 道

源氏小鑑俳諧歌合卷之一終

源氏一ノ十七

源氏小鑑俳諧歌合卷之二

庭上花

四方歌垣老師撰

下毛朽木

守

裏微加苑さりみのくわんの祕庵ひあんのをとれ風かぜと月つきとそり重おもあはれ

総

うのるうのるのまざれて嘆なげは又またかまくかまくとまつ居ゐまつ

常麻生

守

あわごととのの爲ため入いとどくとよくとせぐはくはまの爲ため

九

功いのひむき様さまの稱めいさくらるはめのあぐきくや度たまえ

大

裏微加苑さりみのくわんの不ふぞそくとくとくを二階にかいの室しつへゆひはくをせ

世

まものやかの度たのうを稱めいさかの稱めいさかと稱めいさか

奇志久

かのひむき様さまの稱めいさくらるはめのあぐきくや度たまえ

大

裏微加苑さりみのくわんの不ふぞそくとくとくを二階にかいの室しつへゆひはくをせ

枝

躬

全

真

菊

すのやせねヒ一同を喜ばずより多く座籠の多
新様を取るも身のこなす者やえの風ふかへまきよ
全くのりぬるに心とて新様などおわらへ差向ひの物
えれどもとやおさうびとあやとわやう色の明
仰ゆく口とあくを能むるをとくとあら角乐
まめくらうとゆもあり称あぐもと色のもの生
度をうながす人ふれそ遠入へやまく風の弾歌
あるゆくもとまくとよせ歌えよもねみあはりと
日妙加花一
葉あとの名ととてあらむと色ふむとあら葉あり
多とみうねの様とてはまくとてあら葉あり
上扇の歌れわまくとてあら葉あり
奴

あとはをかくせばあとのえよきふくもれある
尼人ふむ枝のわかれぬと風かみもつらすり
守仲よりへそりくともまのまやうのあらんむけのを
厚の園ふる木のまくはきをねんじまとこめうとせ
あらゆるちやうめい、葉のあとの筋理とこめうとせ
奈良へうづ櫻のうのまくもあら枝の筋理と
泉すれ枝をけくとてのむかうづくと拂の筋理
東さんと一枚をへばすきひくと拂ひもむくと
竹女あらゆる人のとくと拂ひもひまきまのを
たゞれ秋ますわらひとてのむと拂の筋理
籠女

都下の水路を行ひし舟橋の干へゆくをさき
ちうどよりと多くも度不故も寒うやかへゆくをさき

川舟
入船

裏微加花二
やまと雪人也あらがつ風さみうせみゆを先
か扇との葵がれとなりやまつうちのひのま車ひ
江戸のあきゆをとままでハ猪ふ猪とよそわる道

苔成
糸

目極
とあめくだれまき地車ま車はるのまのからが度
うそくばうの車の下地わらをもとまきくま車のま
まくま車の物をもとまけむとまくま車のま
十すとも松を引くま車のま車のま車のま

川
南
長
縫
女
雄
賴

葵のま 物見車 同 撰

源氏二

波那細
病ゆく縫もと曾古初聞る 相愛甲

崔迺酒盛

ごせんとひく新まくふ

庵搗もむく不海葉ハ 春秋庵

永文

そくもくあくび教かる

裏微加花三
かりも初人呼も浦ぬ 秋榮庵

方都子

ま車もま車

与鳳亭

唐くもよのゆくふ 枝成

盛岡

秋葉をもあらう候や 神ノ御
枝成 福徒

かみねうめくふくく海くま車



かたまと事ややがれ因もるはくのむはくとまく

全

ち音の水もあらまでもうひめめあら出門の罪

上總勝浦

松原ももら種をあら手ばれもあせすもら種

廣

まきわらの田のとくとも風のやうぬけもるりを

住

まの多く鍋とくとくゆかく男のうへくまうを

子

えのひのひづのほほと川でまくとほほの花園

物

経園金花多すとまくひ葉をよ枝の花洋川相手つ

好

まくせのまくせとくまくひのむかのまくすとく

奇志久

まくかくあまなびくとまくひのむかのまくすとく

綱

人ノ見つまむまくひのむかのまくすとく

福

まくすとくまくひのむかのまくすとく

養

まくすとくまくひのむかのまくすとく

澁

まくすとくまくひのむかのまくすとく

愛

まくすとくまくひのむかのまくすとく

澁

花教里の走

時鳥

鶴長堂撰

鶴立沢加瀬二

ほそきい物をよみがえりてよみがえり

糸

財をひきとひて絆しておひゆのまくひのむかのまく

柄木

数

ほそきい物をよみがえりてよみがえりてよみがえり

糸

こひきい物をよみがえりてよみがえりてよみがえり

糸

人をほそきい物をよみがえりてよみがえりてよみがえり

糸

をほそきい物をよみがえりてよみがえりてよみがえり

糸

をほそきい物をよみがえりてよみがえりてよみがえり

糸

をほそきい物をよみがえりてよみがえりてよみがえり

糸

萍

川

南

世

雨

節

躬

守

富

守

住

守

多才の人の詠うるほとまぎれの色絹やあやゆき

竹本数

歌がよどむ歌をうたひの時やるかまつらをうてゆく

八日市

月の桂まつさやかのんじきのまふあくみ祝

押

獨り處をさく用ひた葉のさとらまむあけ山を

滝

をかうてさとのまれを時もせざれらふ雪やじとお

惣

アキナ人氣やまくとせとうごくはなせすのけら

万都子

時をかうへおのの移うけめあまき初音をうき

哥多丸

嘆けさん歌よめのやまびと御城がまぐれくも

麻生

たちのれのあらまとのあ紙をゆくあせとまくとまく

哥志久

まち住くよまれのまくはすば坐をみゆ初やまく

武大沢

うま日をまくよめにク有ふあまけをうけくゆけ

川船

縫女四ッ起松俊人有内匠

あやめよちき影程や被庇褐をねまびゆかへる

静風

あざみこそぞれゆ時をまほまほ月せらるる

歌

ほくまほくゆすとゆれば朝の形よ、首月の影

種

時をちよと持が蘿年へきしとくふあせをやうだら

春雄

ほくまほくゆすとゆれば里をゆくうきはのまくら

守

あやめよちきをゆまきはのゆのゆる初やまく

守

木立山加根一時をゆくゆくゆくゆく秋深く暮れは度の裏を

津

ゆめゆめ持ひゆのゆくゆくゆの被すら彦モつづ

高

却とあるとかもうて歌のがまに向ひ聲やつてん

安

ほまきゆかね、あがほ度の角をひきをまくとよ

菊雄

五

上毛小侯

竹

真

高

古

刀自女

松

賴

田

内

匠

種

成 丸

音

總

奇多丸

友 賴

全

夜 宴

内

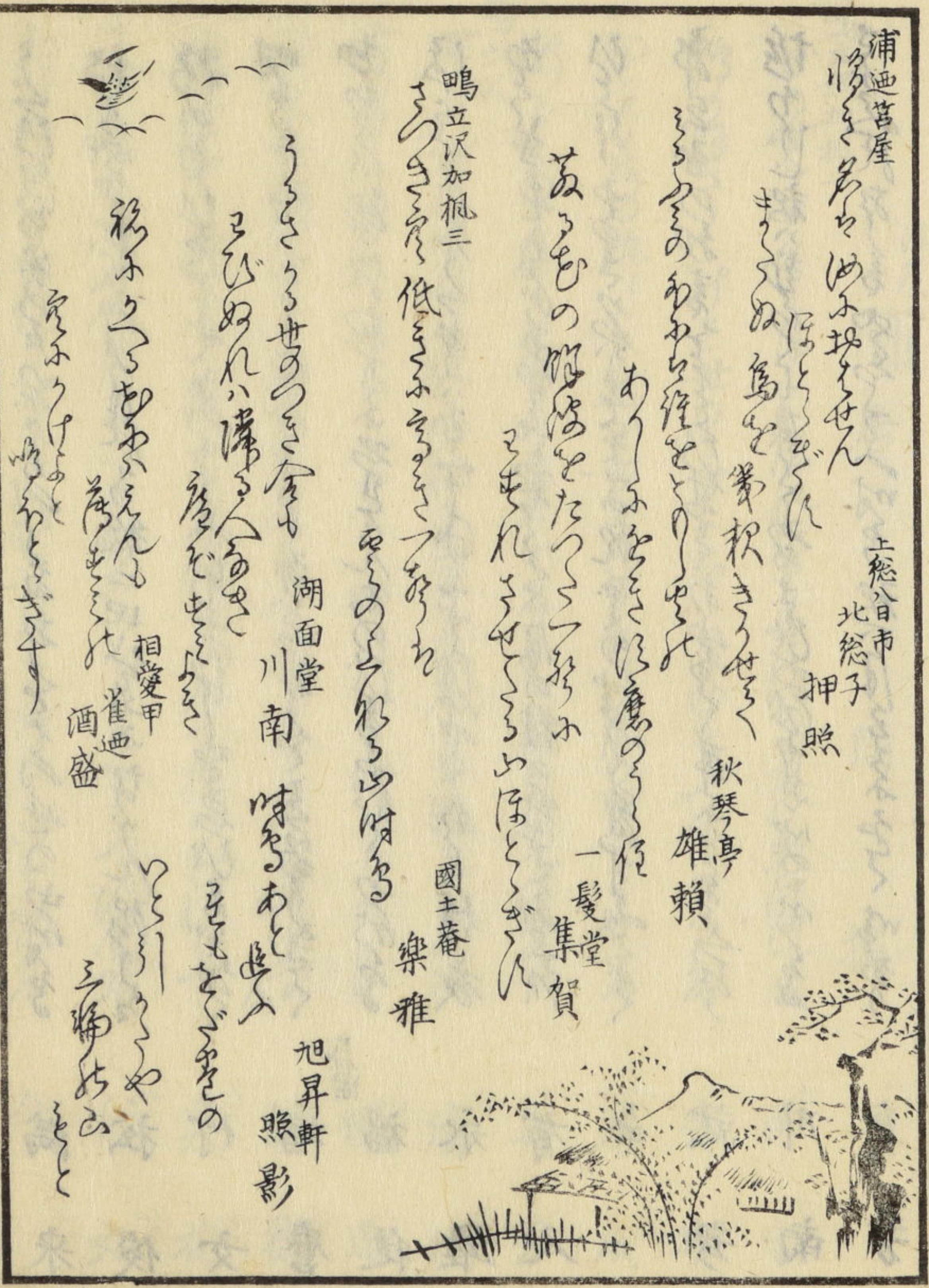
伽 人

万

寿 子

下 守

多那きうじハは度のうもてハレよ聞か不候僅のん
 やまともあがめと晴るきとひ不ぞ争ふ事なし
 世あハ終きくもくも根の多きよ過ぐなく何を
 姉一毛とすむ多の絆より再びれも初をさざれ
 て多とせとすらどきひけりあはれてり初は多
 投却せり無事をまく不事か一物の不當の時を
 二十の窓をくらひるを紀原ふつを初月を至れ
 溢れ舟岸へとれ時をまくハ道と人扇をもけ
 五就出づ新月夜をもととまくは月をもけ
 財をもけまくは月をもけまくは月をもけ
 美の香をもけまくは月をもけまくは月をもけ



まごひはの音の古の音をかくとおおせの山付を

滿 来

宿をあわねあらはれす紙にふまかなんん取るも
梅の白いもとてあらみがわむとあひまをかく

福 竹

時をとてうまふうせうとあくわと三ありきく
あらはれ音をひまかんちのひまかく山付を

蝠

ほう音はうとせはむとあさびなみの音夜
やう音を自らあらはあらうとゆの桂の枝下とあら

永 福

ひまかのまくらをす紙の枝をめぐらす
郎云の初音をとひまかわく耳ふとまくら

有 会

抜かりし秋のむらじ耳ふとまくらひまかのまくら
まくらをすやあく耳を秋のまくらひまかのまくら

就 川 南

郎云の初音をとひまかわく耳ふとまくら

彦 真 芳

秋のまくらをすやあく耳を秋のまくらひまかのまくら

守 雨 秀 为 真 清

鶴立沢加帆二

近歳の風

同 撰

源氏二ノ七

成田

清照苔菊一川全真夜静綢
住道成丸夫船 菊宴風子

さへあらまきあがひとゆうのきよさうであきをとおる
物語をうきをせんとのきくもうじをほううる
片のゆきか山里よかんをほもひほううる
西原もほそすとおふかく第一うす地のみだすとお
引のゆくとおむゆすれやあまめ氣まくふりゆく
月よきとおむくとおととととととととととととと
軒のれわのあじのあれてせのとれむとととととと
そととととととととととととととととととととと
薺の世ととととととととととととととととととと
ありの柳と川の種をたててを新あともえまき
せまくしゆの種と新あともえまき

きせハをくもれく空不あまつて生むるか

日を

寄鏡恋

同

撰

松成

鳴立沢加根二
終されハ猶アリモアリアリ度やまアムビ

あらせぬナリシ人をまくナハ嫌度の事ナシアリ

麻生

泉花

鳴立沢

血のあまご爲度の事ナシアリ化因モニモ

奇志久

逢女

湯

湯

猪アカハシヒト度モアリナシアリ度ナシ

糸

賴雅

猪

猪

猪アカハシヒト度モアリナシアリ度ナシ

哥多丸

樂女

猪

猪

猪アカハシヒト度モアリナシアリ度ナシ

相高森

笠女

猪

猪

猪アカハシヒト度モアリナシアリ度ナシ

岩和田

登度女

猪

猪

猪アカハシヒト度モアリナシアリ度ナシ

原光二

躰女

守仲九 住雄成 徒成 桂枝 来真 成直 满來 女成 桂枝 松福 桂清 桂永

盛田

相高森

岩和田

原光二

原光二

原光二

原光二

原光二

原光二

原光二

守仲九 住雄成 徒成 桂枝 来真 成直 满來 女成 桂枝 松福 桂清 桂永

盛田

相高森

岩和田

原光二

原光二

原光二

原光二

原光二

原光二

原光二

住子賀人雅曇近南川内愛伽集真綱

一夫

源氏二十一

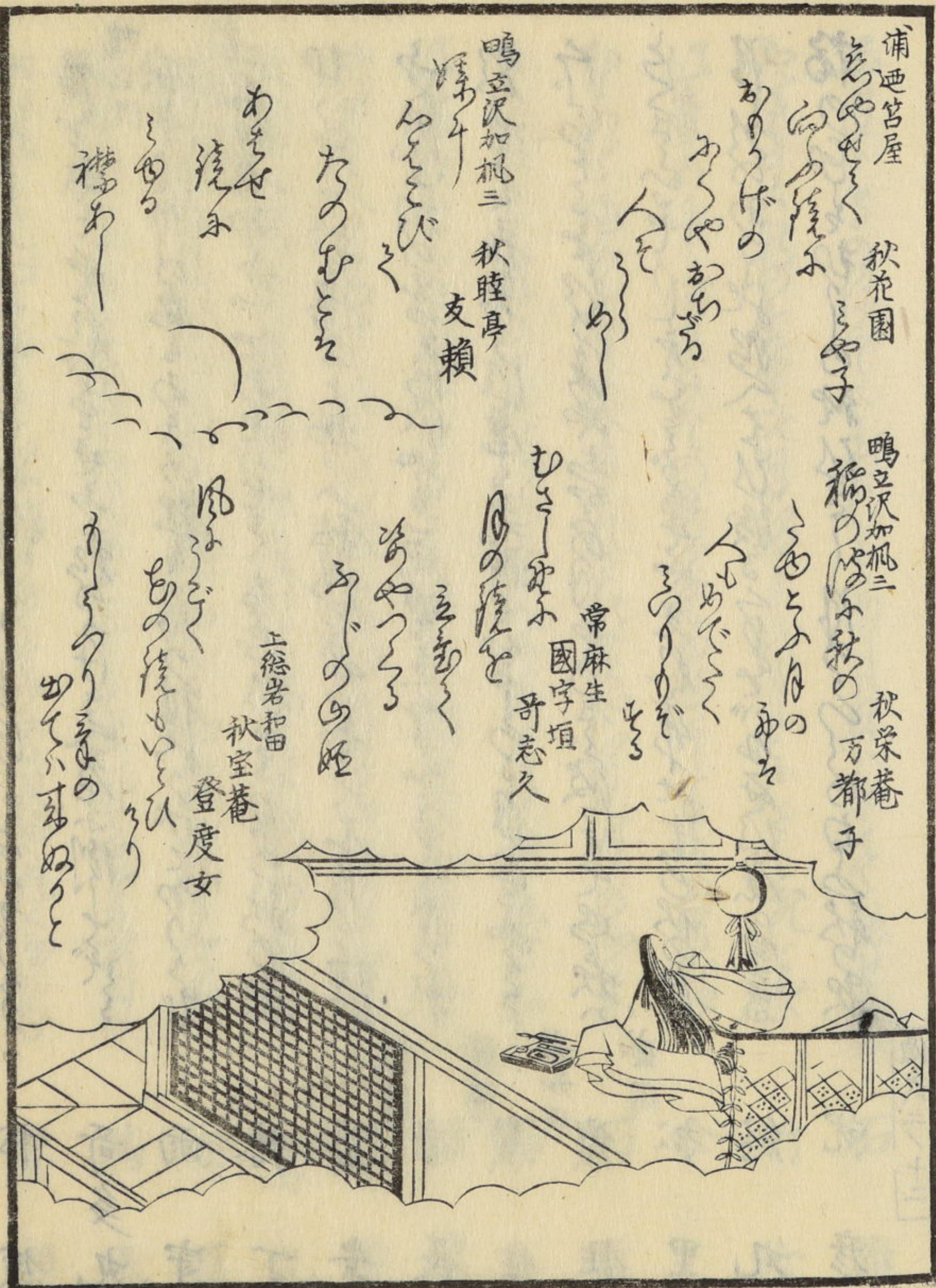
うかひは日あまに此境と嫁ぐんとてうござる
絃のうちのじ花拂ふとかくやふとぎよりれ
涙顔を重ねどすむ被ふとすむ鏡もすむわく
けすき何とすまし神がれどまくつ朝めやつれを
多くまくうづきのうかくうかきふうとおれ
鶴林の序あそぶやとくのかくの附とくとくの
つばさくまきの詠ひはまくわゆき
又ひと含みがまみてのまよじうとまくうみくき
うかく意想く今ハ恋歌むえまことくは院うき

秋月

同

撰

鳴立沢加根ニ
あそびまく人間まくわ歌の音よ月のまくは拂ふ



さうづまはるか船の海をゆく日を波も空あつて
月をとむとおれがよせうねうけの座下例をぞ
鶴立沢
君のやうの身があきのねくは種はうたとからくむ
二み里あやふらどあそびせくあづひまほのめの夜
かくまは形態まと拂ふ松風の音もまことを月を守
やく風相の音もてゆゑと底望みうすとゆく月の秋
歌ふも風や月も吹きとてゆきやそれ舟とまつて秋勝浦
うらうらとゆくの風や月もゆきとてゆきやそれ舟とまつて秋盛岡
とくまの風もしきとてゆきやそれ舟とまつて秋岩和田
月のあへと月へとひ渡るうすとばなね風の葉
宿のゆきむくの神ひまつゆきのゆきのゆきの秋浜

松 俊 奇多丸 雨 守
椿 高 長 安 丁
高 岩和田 勝浦 广 岩和田 盛岡
椿 高 長 安 丁
就 総 松 九 彦

骨の弓の弦と弓を引いたる林へかとて原せ
たるのれの音と音と月移りと月と月を
は廻わく。酒の音の聲もむかへて月の音移
却と移し聲も變まつねは聲も月の心系
てう廻るの音と月と月と月と月と月と月
は廻るふくらむとめくらむとめくらむと
月と月と月と月と月と月と月と月と月
あの人へひづくと月と月と月と月と月と
模倣山加根一
月と月と月と月と月と月と月と月と月
月と月と月と月と月と月と月と月と月
利隱とて軍をもと附り老矣まことにあらへ
系 賴

おとねあひうらつて身のひまを向ひ聲のくにん
秋の扇ふるみのむと爲教の意のまとほと麻かねをまぢ
このときのうがひとほ庵のうづれやくみ教をまぢ
一萬のうちふあめも人まやうびふまみ教をまぢ
ふあきまきのまほの身をまきハジ教をまぢとまぢ
臂のまのやうかからだもとあるまほのねまさん 八日市
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 岩和田
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 舟
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 丸
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 九
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 子
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん や
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 總
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 川
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 南
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 照
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 人
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 樂
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 竹
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 頬
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 菊
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 真

原氏二十三

まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 福
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 養
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 春
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 雄
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 二字成
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 真
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 直
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 物
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 成
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 千
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 形
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 影
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 物
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 薬
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 大
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 枝
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 茂
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 登輔
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 毛相生
十五点 金魚つる
まほのまかたはくまくまほのまほのねまさん 扇面画贊合
當座 扇面画贊合
尽語樓大人判

景の事は少く少く以て千鶴月の風をみるん等と
雅良持つて度を以て千鶴の事御ゆきりと承
取と不せまや花の事は圓の以て千鶴の事あ
ゆの事ゆが少しあの事あつてもあれば圓の事
以て千鶴の事あつてもあれば圓の事
刀自女
真鬼
照
永女
菴住
盛田
長
竹女
宴
夜
物好

汝千鶴りとす。萬葉あわすをむかうひ貞わらひす。松
汝千かくゆの、ねをぬるをひうそくちよかく御めじす。内
かく風くちづふあひけの御ふ人のはうつ汝千鶴ふ
様鶴汝千鶴ともまめのきやと鳥とのうひ持たず。松成
因故をくらひの男能ひりきりらと能す汝千鶴ふ。竹成
案をのき
開路全撰
裏微加花二
而翁のゆくも不善をもあざくとむのま。盛田
裏微
これづくゆくとあとゆくとおとむらわのまのま。常江戸崎
者へゆきとおとせたゞくとがもすゆきとじゆあり。
奇多丸
葉根ひのぎとよもす葉すけと汗とバ生えあくらむ。播磨野
静丸
静風

目次

旅宿傳とよ御出でる方よりはあらわす經よりも多忙

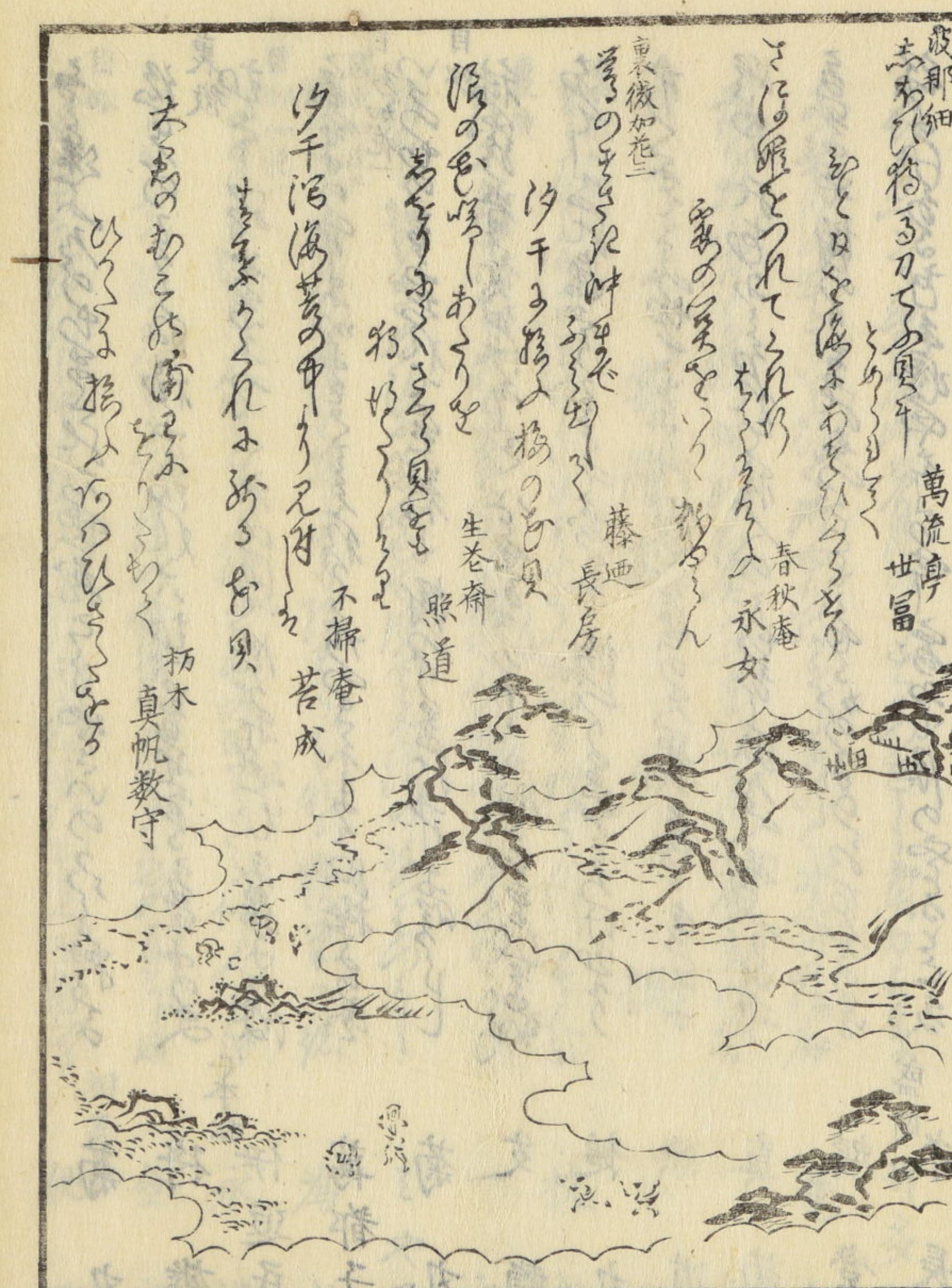
常江芦寄
元弘名古屋

旅人の事とと経のぬる事とを改めひそむかうの算

私身さうの事とく旅かうみやの事ふかうの川の奥

石をきれりとてかく風を又素色アハセぬ刈草の事

初秋さうの事とく風を又素色アハセぬ刈草の事



故鄉

龜長堂撰

真
頰

武川又安丸

滿留喜

真菊

萬都子

全

卷之三

竹女

泉
花

真
慈

直
通
關

古松

鴨立沢加根二
むかひのむきの鳥を育むと相手さん
鳴立沢
わが身もありし者の神様ふたあくやむらわゆる
たゞもの身の主徳のまへますまつての父をすまつての
たゞもの身の主徳のまへますまつての父をすまつての
枝 三 照道
枝の身の主徳のまへますまつての父をすまつての
枝の身の主徳のまへますまつての父をすまつての
泉 花
泉の身の主徳のまへますまつての父をすまつての
泉の身の主徳のまへますまつての父をすまつての
竹 女
竹の身の主徳のまへますまつての父をすまつての
竹の身の主徳のまへますまつての父をすまつての
波々伎 一 夫
波々伎の身の主徳のまへますまつての父をすまつての
波々伎の身の主徳のまへますまつての父をすまつての
刀自女 世富

縫女
御子
糸長
内匠
播竜野
静風
樂雅
満苗喜
甲良
川南
有子とあらわのちに
春子

卷之三

鳴立沢加机二
山里の秋

真
菊

風雲變色の如きは、さういふ事もあつた
鳴立次
日の行は世界をやうやく見ゆ
ナニモ此處は必ずしも

秀 捷 無
雄 丸 丸

多因々くちも喉もへうそとのひもじにしのタヤケは
鶴鳥のそりをもとめのをまつてよきうえのを

梶丸秀住雄清佐女

真為成菊

日向の山中をひそめさせりて、その御子のものもあらず
やうきの山やうどくれぬ御事の九死もありらず

後漢書
卷之九
比丘尼傳

多分の事は、遠くへ渡る本家の行
方を知りたが、そののちに、多くむじの

初女

卷之三



古をかひひそぞれは塵の塵の風をあくと廉くあまめ
きとも深く思ひそむかみのりふたご歎うるゆくも夕時也
多度をかみそくやあひふたご歎うるゆくゆくも夕時也
第ひやわんをひきとえの内がたくちうそのかぐい
山の裡の裡あつむゆきはるくよしとあらわすを
多度ふあくとえふての川ゆきもの裡ゆきとえ
馬糞のひのひに秋やゆきのひんづあまくとえの裡
ゆきとえあとのゆきとえの裡ゆきとえの裡
七夕をゆせむをうきの裡ゆきとえの裡
うの葉をかむりうきの裡ゆきとえの裡
紫のとくとくや秋ゆきとえの裡

内守名從子
洛福
奇多丸
笠女
萬象
變淹
松奇
櫟木數
奇
武大沢
常江屋
元有
長房
永女
吳竹
川南種
賴器來
鷹滿雄
日の朝と暮れとよきのまことに
日の朝と暮れとよきのまに

内守名從子
洛福
奇多丸
笠女
萬象
變淹
松奇
櫟木數
奇
武大沢
常江屋
元有
長房
永女
吳竹
川南種
賴器來
鷹滿雄
日の朝と暮れとよきのまに

内守名從子
洛福
奇多丸
笠女
萬象
變淹
松奇
櫟木數
奇
武大沢
常江屋
元有
長房
永女
吳竹
川南種
賴器來
鷹滿雄
日の朝と暮れとよきのまに

鷹立沢加机二

朝顔

全撰

常江屋

元有

鷹立沢

朝顔

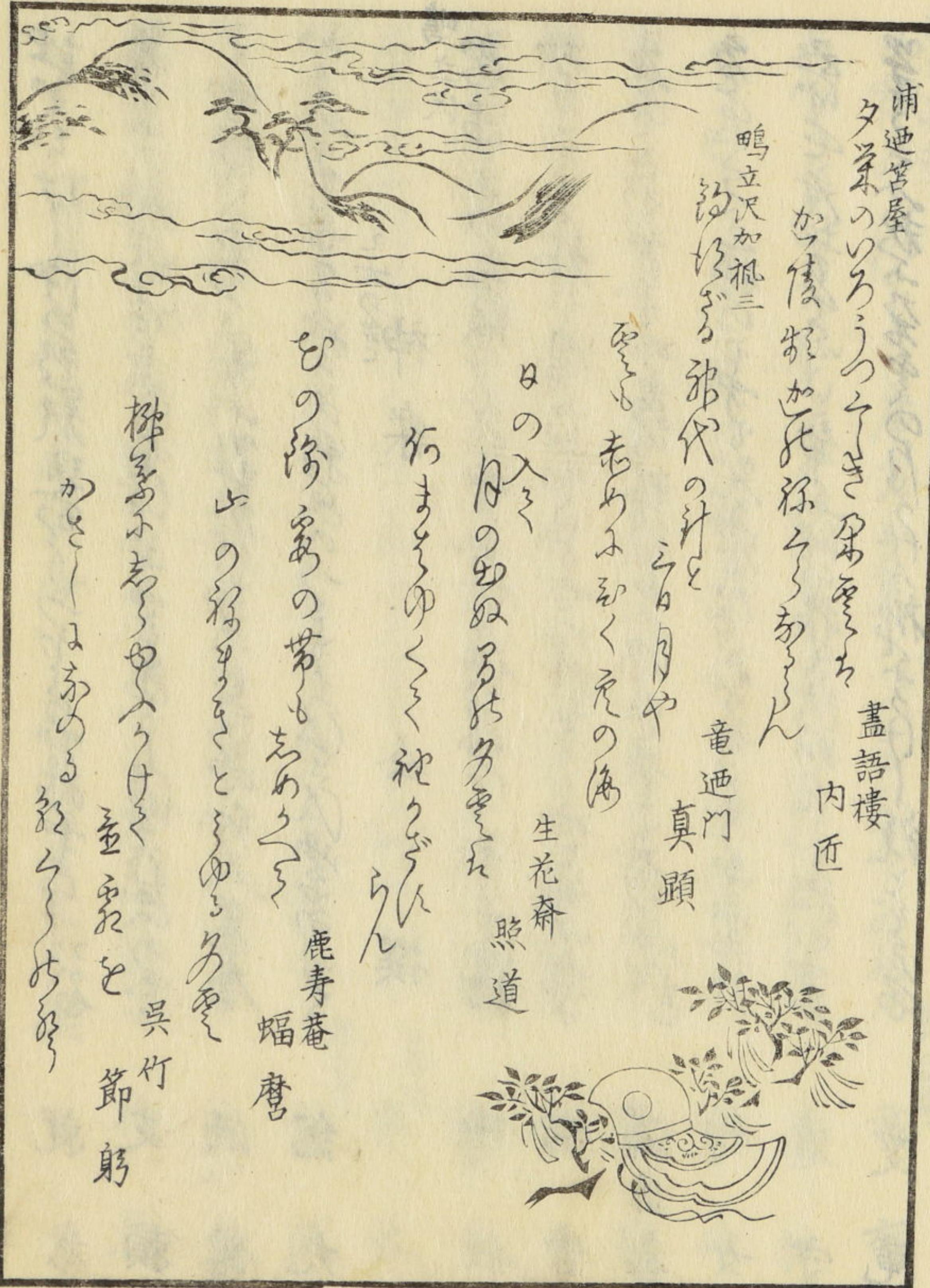
全撰

常江屋

元有

原氏三八

重音ととけ子を拂とすはるの聲もとぞまし給ひ
玉筋の日を薩摩に化粧すとまし給ひすのをとくえ
絆取の貝をきりかへる銀鏡すとれとぞとまし給ひのを
轟煙すやの絆取すとれとぞとまし給ひのを
浦銀つらひひ湯の聲の照りたすとまし給ひのを
さのねのあらわすとまし給ひのをとて後りふせ候
お銀すよと鷺鳴すとまし給ひのをとて後りふせ候
初 文 嶋 竹 全 真 頭 德 安 利 下 守



地とくに御跡の移氣遠かづきのすれ事より
多ぬの處りやとのをあびてふる事もむし難いのを
もと詠くもくわが終歌のあり身ひや入萬葉
かきのすれやうせうの歌のつまむひよん嘆かく

こ女のき

神樂

全

撰

就
友
賴
彦

酒
德

總

九

鴨立沢
お伊のもの歌の多き變れを林森すまうの歌
ゆき野の櫻と桜ふるをさげて行なうやと多き變
原をさくやうりやまの松井糸ふの多きあつむを
色あさく病のさむらんをなたでありとうと見
み室を走れどと聲の歌をびぬとみぬがま
まうすおふ至るの月とへ拂ふうけ一鏡とぞうる

清
佳
蝠
磨
竹
道
守
愛
滝

模立山加根

常江寄

ひのくが風をまく廣あふ玉とちむむ歌うの多
あくとまづれてまた歌多きとまうの歌井井
うさくうふきの淳是能のからふ歌歌井井と
白井義のあくまでもうのを歌おまくはうくま
おもくまくはうのを歌おまくはうくま
すまく井井とまくはうのを歌おまくはうくま
おもくまくはうのを歌おまくはうくま
がゆきの海の事ふうとまくはうくま
歌のうりゆくよれ葉あせまくはうくま
様くはうのをくわくよへて女の聲の多く
當座 扇面画贊合 森羅亭大人撰

播籠野
盛田 静 風 長 菊 真 人 伽 全
物 築 三 や 子

十三

多の事のへ
あるを乞ひ

將雄

多分の事は
おもむくに思ふ
が、おまかせ

愛
淹

卷之二

歌和成

萬葉集
物事の秋がも
萬葉の秋がも

竜門

霄

將雄

三

不知

4

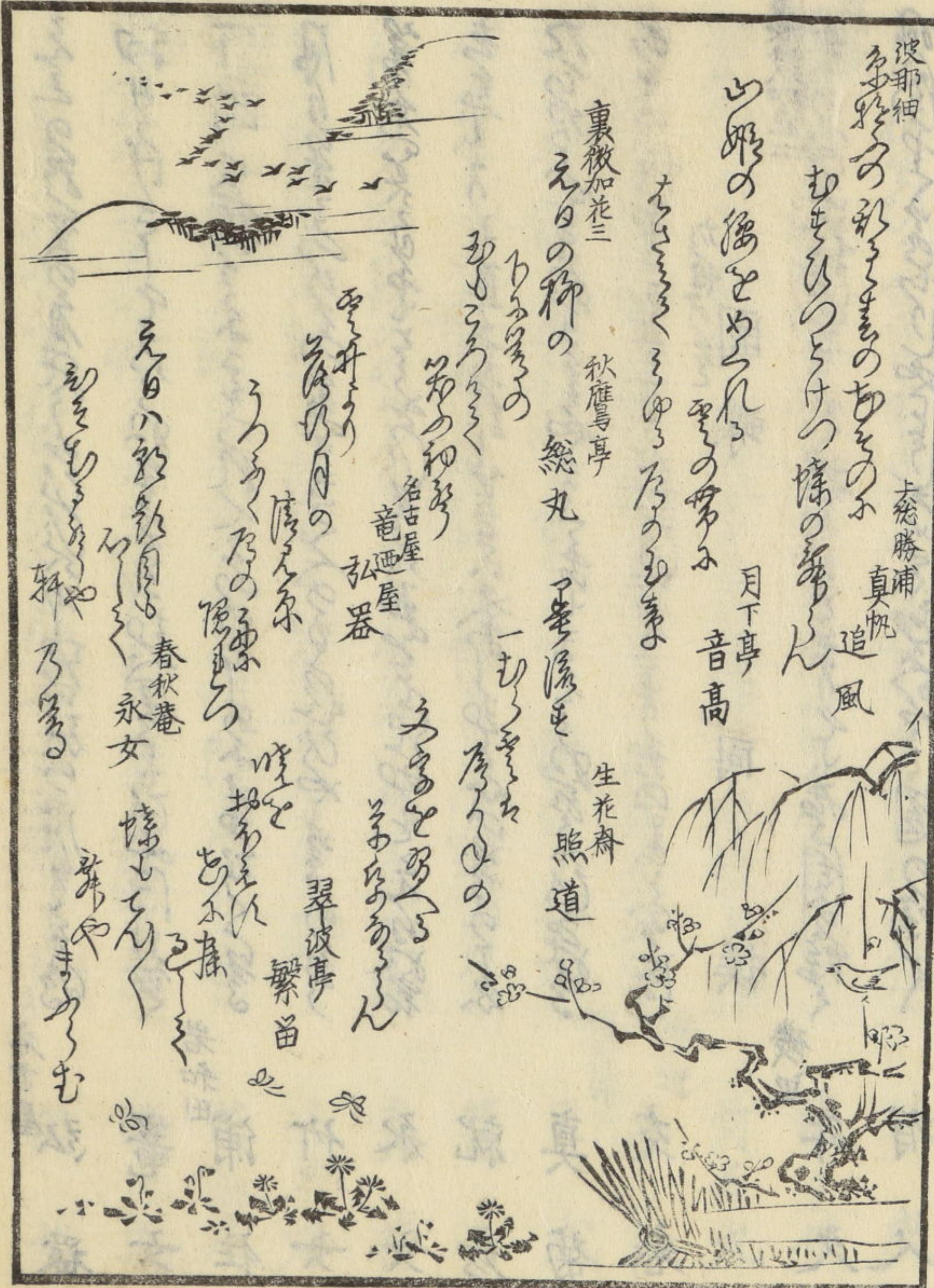
梶
丸

七

萬象

源氏小鑑俳諧歌合卷三

菊のほんとをもとせよ。此の處にうなづく初夢　眞　菊
あくまでまことに。さんざんとおわじりゆきまよひ　相模邊
ちよびひのやうをもと初夢をひそぐふかひるきよみ　年　久
めめのまづくえりはん事とまつたるをも　乃婦女
めめじよのわゆりでぬきのまづくえり　内　匝
竹のまぢねやうれづれづれのむすび　清　住
ゆきのまじねやうれづれづれのむすび　長　房
めめのまぢねやうれづれづれのむすび　泉　花
めめのまぢねやうれづれづれのむすび　東　金
一のうきみハ磨擦のやうにあらわしてぞののまぢねやうれづれづれのむすび　眞　宵
當里のまぢねやうれづれづれのむすび　全　人
熱乞のく事とよバヤシハタマツル時きうじゆの多　長　人
あくまでまぢねやうれづれづれのむすび　江戸崎



卷之三

名古屋

公屋

卷

初日びびきにむかひて
下云はれどもあらず
岩和田浦

岩和田
浦 篷

佳女器

月日はまことにあたまのよしむらのじゆく
第十一回 おとことおとこのふれあひ

七言律詩

女女

を尋ねるも耳にされし者多く又おどきのアタマ
たるものとぞ思ひてゐるやうであるもまたこの内
ちの仕事あると云ふもうつづくの如きの事と云ふ
あとの仕事あると云ふもうつづくの如きの事と云ふ

竹永就真友

春菊彦女女

蝶園同撰
於蝶之卷
裏微加花二

殘
年

久 先

園蝶

同撰

三

三

萬葉傳の題被せうとさへ見はまくやうのを若

節躬

葉のあふみのきづくに傳へたの園の風をひだ

万都子

どひの小園やうけぬんばはく風をもくく園は傳く

乃婦女

きく風をもく風をもくと、着物か紗で映す風の傳く

苔成

お園の草つる草の種の傳へ様が葉の風をひだ

滝津

初午の音をいれへ種をくらむの初午の音を

真顔

鳴立沢加帆ニ
あくべあくべ毛矢毛矢とよむをと拂へよきくは種をひだ

江戸寄元

沙子ねこてねせ一毛とて多の風をもぎりせむ

有清住

青男やまととみーありせすのう毛をうかがえ

哥多丸

和が葉がゆく神の三毛の秋をどじ年未出かさん

總丸

お葉の草つる草の種の傳へ葉をひだ

雨守

蜜の葉の葉をひだ

萬都子

どひの小園やうけぬんばはく風をもくく園は傳く

乃婦女

きく風をもく風をもくと、着物か紗で映す風の傳く

苔成

お園の草つる草の種の傳へ様が葉の風をひだ

滝津

初午の音をいれへ種をくらむの初午の音を

真顔

あくべあくべ毛矢毛矢とよむをと拂へよきくは種をひだ

江戸寄元

沙子ねこてねせ一毛とて多の風をもぎりせむ

有清住

青男やまととみーありせすのう毛をうかがえ

哥多丸

和が葉がゆく神の三毛の秋をどじ年未出かさん

總丸

お葉の草つる草の種の傳へ葉をひだ

雨守

蜜の葉の葉をひだ

萬都子

どひの小園やうけぬんばはく風をもくく園は傳く

乃婦女

きく風をもく風をもくと、着物か紗で映す風の傳く

苔成

お園の草つる草の種の傳へ葉をひだ

滝津

初午の音をいれへ種をくらむの初午の音を

真顔

あくべあくべ毛矢毛矢とよむをと拂へよきくは種をひだ

江戸寄元

沙子ねこてねせ一毛とて多の風をもぎりせむ

有清住

青男やまととみーありせすのう毛をうかがえ

哥多丸

和が葉がゆく神の三毛の秋をどじ年未出かさん

總丸

あくべあくべ毛矢毛矢とよむをと拂へよきくは種をひだ

雨守

蜜の葉の葉をひだ

萬都子

どひの小園やうけぬんばはく風をもくく園は傳く

乃婦女

きく風をもく風をもくと、着物か紗で映す風の傳く

苔成

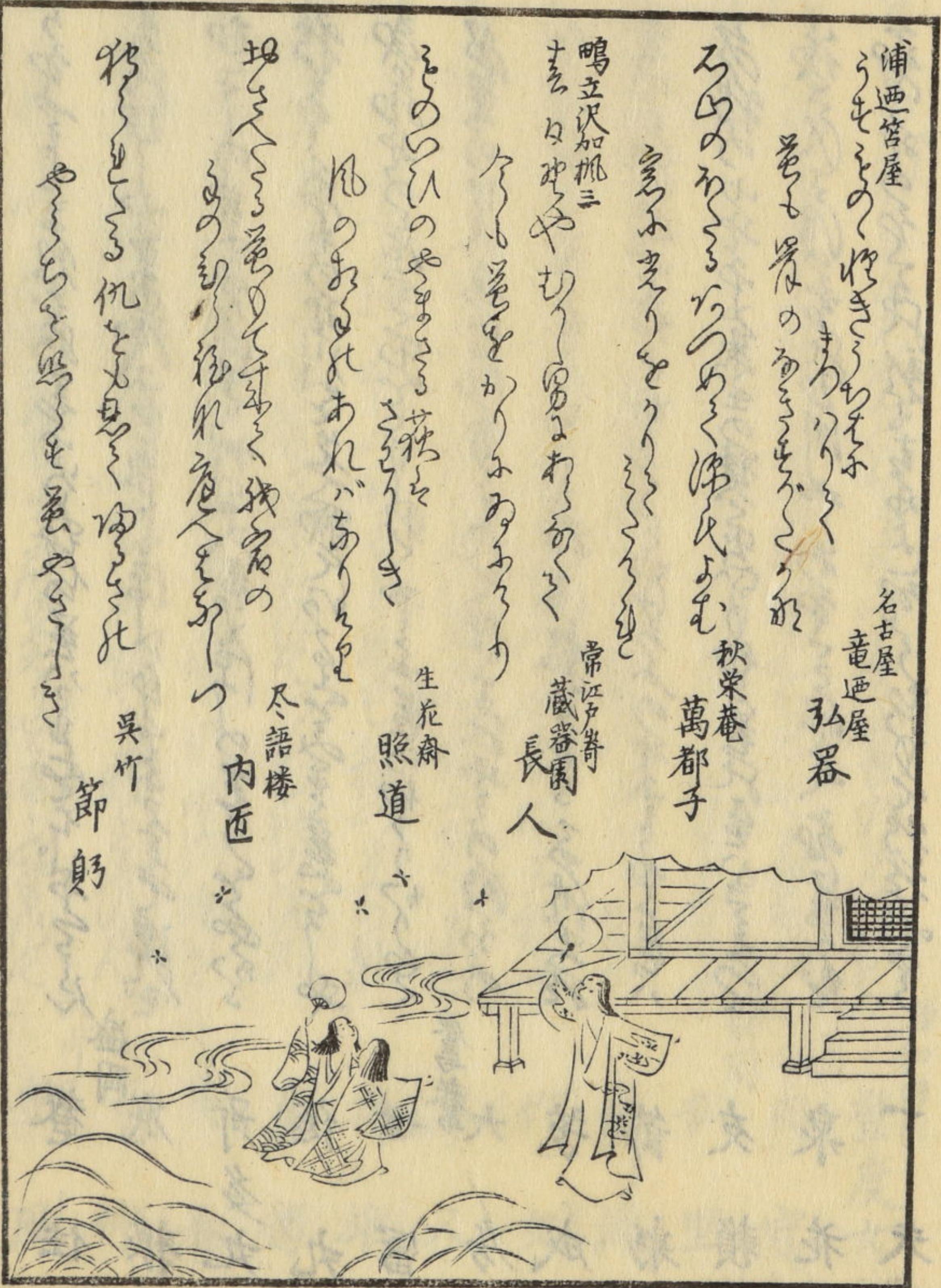
お園の草つる草の種の傳へ葉をひだ

滝津

初午の音をいれへ種をくらむの初午の音を

真顔

帶心物奇真就永有綱真內永
丈好種春彥雄人采頭匠女



うすまもあねぞぬきふとくの風ひをもすやうに
ゑはせよ。小まめの代ふをあどり序とゆてかほふをもるを底
むさづのまよつてゆく川。又入善と序のまよつてゆく
物あつて富士の河を先へ歌へてらまをみましまとす。也
あらわやの屋きをとくやくやまの風のむづりかりゆく
おまのまよつてゆくのやうれは船。船とまつてはたれ
ふくべのいとまよつてゆくのやうれは船。船とまつてはたれ
まのむづりをゆくやくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆく
おれのやせよと森の葉くもがゆきをまよつて
おれのやせよと森の葉くもがゆきをまよつて
葉くもがゆきをまよつて。歌ひまよはせゆくらむとおねがひ
おれのやせよと森の葉くもがゆきをまよつて。歌ひまよはせゆくらむとおねがひ

一夫 芳 賴 脇 肘 成 肩 腹 大 鶩 鶩 世 九 奈 丸 根 住 巷

泉 花 友 芳 賴 脇 肘 成 肩 腹 大 鶩 鶩 世 九 奈 丸 根 住 巷

源氏四 六

あらわの川をあわせかたをまきてあらわの裏野あらわし。
岩和田 登度女
あらわの川をあわせかたをまきてあらわの裏野あらわし。
内 守 盛岡 松
あらわの川をあわせかたをまきてあらわの裏野あらわし。
愛 里 滝 女 人 雄 真 支 竹 琴 将 守
あらわの川をあわせかたをまきてあらわの裏野あらわし。
武川又 安 風 仲 春 菊 人 雄 真 支 竹 琴 将 守
あらわの川をあわせかたをまきてあらわの裏野あらわし。

鵠立伏加楓二

鳴立伏加根ニ
ササシテアリテハモトヨタニ
シテシテアリテハモトヨタニ

川南

おまえのまじめな所とおどろきまわる事ひ
ねえの匂ひがちとおもつてお

節躬

身をもててはあらわすやうの氣でとまへ
がまくおもふと法事の事

節躬
恥女
蟻通
高安

アラタナヒコのまゝ風景ひれで廻るにあつて
まづかくおもむかきもの様をあらわすものと

節 躲
恥 女
蟻 通
高 安
不死躬
盛岡

節 耻 女 射
蠍 通 安 久
高 文 田 富
不死 躬 田 富
盛岡 全 世 年
鄙 通 安 久
射 耻 女 射
女 通 安 久
射 耻 女 射
射 耻 女 射
射 耻 女 射
射 耻 女 射

たまひの不平事の如きは、必ずしも、彼の本意を失ふ
もの無く、必ずしも、彼の本意を失ふもの無く、必ずしも、

節 豆 年 世 鄙 全 盛岡 高 蟻 恥 女 節
躬 成 久 富 田 安 通 肖 通 肖

卷之四

支 賴
奇多丸
子 綱
夫 一
南 川
住 廣
内 守
雄 賴
永 女
無 佛

浦廻宮屋

あそびのえす浦氏や蟹うろき 秋金亭
かほくわねの處のあひす

秋とよびのぬかるむ丹波を 鎧渡亭 萍

湯くわら宿のちゆづれす

鳴立汎加机三
すゑもゆかの秋のきみゆふ

盛岡

秋田舎

菅垣

福徳

まく萩ひや風のうづや

葉ののぞみやく稀ふく様の

上總東金

秋田舎

菅垣

真宵

ねむふるうなつてのうす

あらんあそせゆきりとれ
あそぶることをきくぬす

秋鷹亭

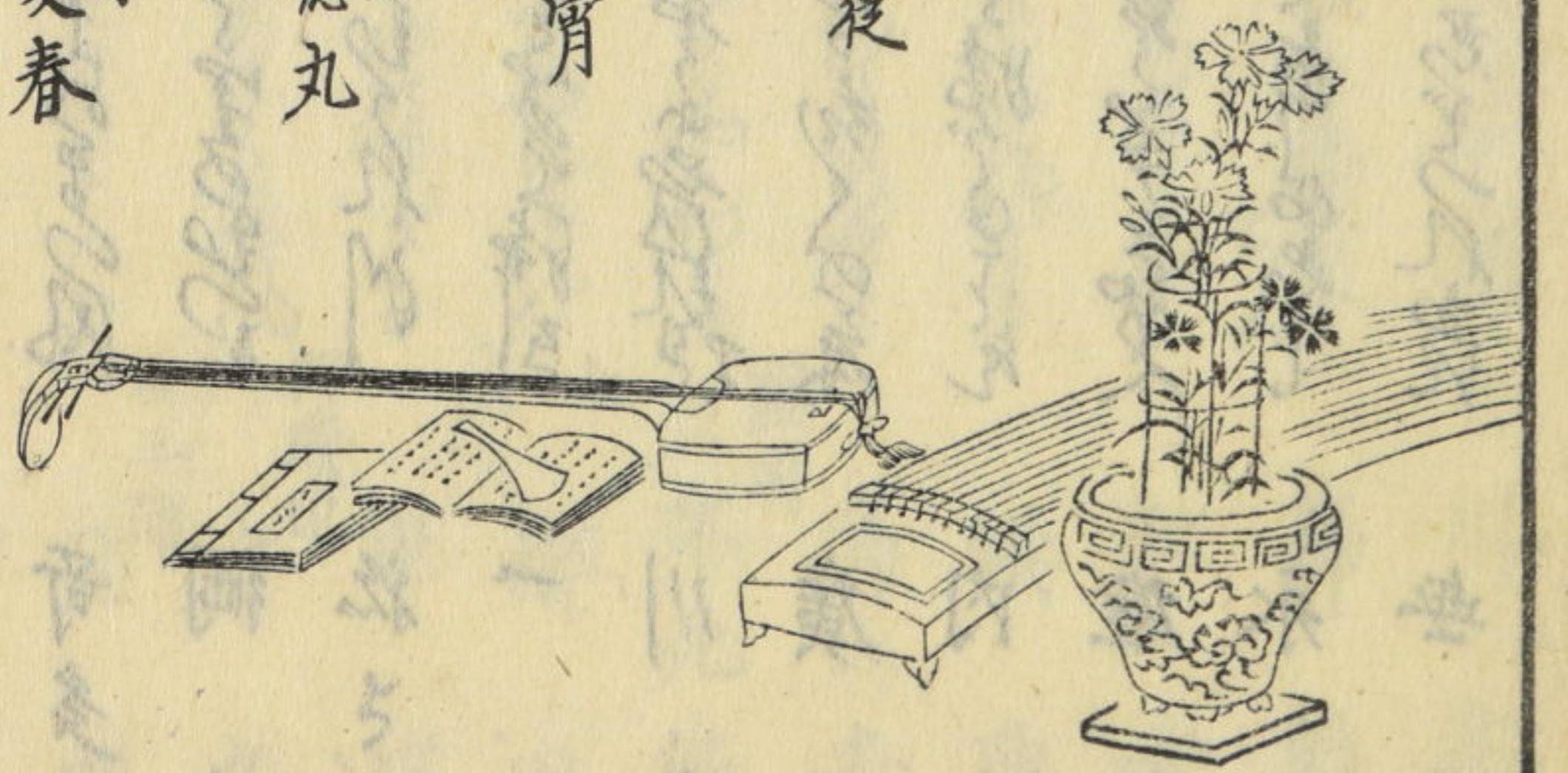
總丸

月のあそべて萩のさくはど 不老園
秋とよびのうなつてのうす

あらんあそせゆきりとれ
あそぶることをきくぬす

月のあそべて萩のさくはど 不老園
秋とよびのうなつてのうす

原氏四九



模立山加机一

やの種もひくかととまれる
妹がゆくはまととくか

上總東金

舟

月の序は夜の詠うそつまぬ望むとむま書物

盛岡

舟

かのうひそめのあめあければ多の好ふしきれぬが
ね風のあひそめのあめれをうきはせはれゆやせ

鄙

舟

あめせし朝やつもすれどもとれどもとんあひそめ

長

舟

うきはせし朝やつもすれどもとれどもとんあひそめ

古

舟

絃和まひひとととつて琴を多く琴不獨や箏せ

松

舟

おまえを音おきのほす琴を多く琴不獨や箏せ

房

舟

うきはせし朝やつもすれどもとれどもとんあひそめ

節

舟

絃和まひひとととつて琴を多く琴不獨や箏せ

躬

舟

おまえを音おきのほす琴を多く琴不獨や箏せ

来

舟

うきはせし朝やつもすれどもとれどもとんあひそめ
おまえを音おきのほす琴を多く琴不獨や箏せ

雅

舟

奇和成

盛岡

七

為成德酒乃婦女

物支真川
好春菊南

同撰

秋風

哥和成

卷之三

龜女

登度女

清 住

卷之三

青
對

立沢加根
このひのをあまり津と森のまちあるのをえり
す所の経は、とまえ筋風ひびとつひを修めの源
えで空一房、か、かじてらまのまく風をやども森をも
せねまく傳教の本のれづりあとよさくまぐれの森紫
車、あまとさり秋のち、ご見えづれ唐風のぬ森の風
鳴立沢
あまとさるあれ、うけまき不地、まきあむ修教のまく森
毎日はまわさとどづくふまく野村の森の風
わざわざみやも森のと風ふわなまく風をせ
をまへて核紋がまやざとおがまく風の森を
あみせの日をめくらひまく風ふわく風の森の風

常江戶書
登度

清

芳

清

聖なる事ありては萩のうなまみを私風のものかむる

樂雅

萩の香りも稀うもぬ御ふをまうあら萩とさうが風とゆき

庵岩留浦

系

あつまめ萩あさく細く葉の下よらきとゆきせす萩の風

盛岡

系

やまとさうぐ萩えひ拂ふぞうくさうぐ松葉の風
高風びくあはれうそお松きとあまくさう萩の風

系

以てふるあらわう萩が葉れとからぬ萩の萩れの風

系

横山加根一

うすすきをめぐらす風のうねふる葉萩

武大沢庵東金

系

萩の葉のちまかはく風ふもむくこゝろの物や

相恩名

系

うすすきをめぐらす風のうねふる葉萩

真

系

萩の葉とあらす葉をあらす葉のうたく萩の初風

之

源氏四十一

毛歌うり竹ちよきく時を取ねお戸やたく萩の初風
物のひりありくもとせせうともあれくらん萩と風
秋それば人のまうとまませて行まくとく風の萩と
葉うらじまくまづくとくとくとくとくとくとくとく
陰毛のあがふあでけむとくとくとくとくとくとくとく
人ふみ時とゆりかねく拂れさうく萩の初風
御歌うりとく風毛とくとくとくとくとくとくとくとく

奇多丸

總丸

永女

内近

滿來

佛物

篆

十五
落葉をうめりうめりうめりうめり
落葉をうめりうめりうめりうめり
十三、
あはれのうめりうめりうめりうめり
あはれのうめりうめりうめりうめり
萬葉のうめりうめりうめりうめり
萬葉のうめりうめりうめりうめり
少阿ハテナリテアハテナリテアハテナリテアハテナリ

万都子

當坐扇面画贊合

年垣大人判

長房

一夫

